



建学の精神

山梨英和学院は、1889年(明治22)まだ女子教育の重要性がほとんど自覚されていなかった山梨県において、すでに熱心なキリスト教信仰を与えられていた市民の有志が、当時カナダの教会によって東京と静岡に設立されていた学校(東洋英和と静岡英和)に続いて、甲府にも新しい時代の国際社会の中で活躍しうな女性の育成を目的とする学校設立の事業に対して、同じ教会の女子宣教会に支援を求めて発足したものである。



山梨英和学院 校章・マーク
カナダに縁の深い楓に頭文字を配しています。5葉は星にも見立てられ、ベツレヘムの星にも通じます。楓のえんじ色は、燃える信仰と希望と愛への深い願いが込められています。

学校法人 山梨英和学院

〒400-8508 山梨県甲府市横根町888

TEL : 055-223-6010 FAX : 055-223-6019



創立

山梨英和学院は、山梨県下最初の女子教育機関(山梨英和女学校)として始まりました。カナダ・メソジスト教会婦人伝道会社と数名の山梨県在住のキリスト者青年実業家との協力により設立され、東洋英和女学院(1884年創立)、静岡英和女学院(1887年創立)とともに、三英和の一つです。

カナダ・メソジスト教会宣教師のジョージ・コ克蘭とデビッドソン・マクドナルドは、1873年(明治6)横浜に上陸しますが、日本社会の男尊女卑の風潮を知り、婦人への伝道には女性宣教師の力が必要と痛感し、その派遣を本国ミッションに要請しました。東洋英和女学校を興した M・J・カートメルをはじめ、多くの女性宣教師の献身によって、カナダ・メソジスト教会の宣教は支えられました。

山梨英和女学校初代校長も、カナダ婦人伝道会社の宣教師 S・A・ウイントミュートです。彼女は東洋英和女学校で教鞭をとったのち、校長のカートメルに甲府行きを命じられました。小仏峠、笹子峠を越え、2泊3日の難路を旅して甲府にたどり着いています。

コ克蘭は東京、マクドナルドは静岡で伝道し、あとに続いた M・ミーチャムと C・S・イビーも静岡を拠点としました。山梨の南部本陣の近藤喜則は、私塾(蒙軒学舎)で元・幕府軍の豊島住作を用いて漢学を教えていましたが、徐々に洋学も教えるようになります。イビーは、近代化を願う山梨の青年たちに懇請され、(蒙軒学舎)で英語を教えるために、平岩煇保を通訳として山梨・南部に入りました。イビーは甲府メソジスト講義所(甲府教会の前身)を設立したほか、3年間で七つの教会を設立しています。

山梨英和女学校初代校長 新海栄太郎も、甲府教会で平岩が始めていた英語会で学ぼうちに、宣教師のサンビーなどとの交流から信仰が芽生えていきました。新海は山梨にも女子が高等教育を受けられる機関をつくりたい、という思いを募らせていきました。同じく甲府教会に通う宮腰信次郎と相談し、サンビーを通してカナダ・メソジスト教会婦人伝道会社に働きかけ、資金は地元で、宣教師は派遣してもらおう、という形で支援を取りつけました。

創立の背景と歴史

山梨はもともと徳川幕府の直轄の天領であったため、明治維新後は地元のリーダーが不足で、教育の整備もなかなか進みませんでした。幕府軍の豊島住作が頼ってきたことから、豊島を用いて家塾を始めた近藤喜則は、最初は漢学中心に教えますが、時代の要請で英語も教えたいと思うようになりました。和魂洋才とはよくいわれることですが、洋才を学ぶためには洋魂が必要である、という考えがあったからです。これをきっかけに静岡から山梨に拠点を移したイビーは、英語教育を妻に任せて、積極的に伝道しました。先輩宣教師コ克蘭が東京大学の隣りに建てた本郷中央会堂(のちの本郷中央教会)の後継者として東京に呼び戻されるまで、山梨での伝道に邁進しました。

そもそもメソジスト派は、急激な産業革命によって、従来の教会の枠から押し出されてしまった労働者や農民を対象に宣教しており、献身的な伝道の伝統を持っていました。それは、創設者の J・ウェスレーがいつも馬上にあって「世界は我が教区」と言っていた言葉にも表われています。

19世紀後半の世界に目を転じてみると、中国ではアヘン戦争、インドではイギリスの植民地支配に対する民族的反抗運動(シパーヒーの反乱)が起こり、アメリカでは奴隷制をめぐる南北戦争が起こっています。アメリカはカナダに対して、奴隷制に対する明確な意思決定を求めますが、イギリス本国の曖昧な態度をみて、カナダ市民は立ち上がりました。奴隷制を否定して、民族や人種による差別のない多民族国家としての在り方を憲法に謳って、1867年(慶応3)カナダ連邦として独立しました。カナダ・メソジスト教会が日本宣教を始めたのは、こうした独立後間もないころのことで、海外宣教にけるミッションの強さを感じずにはいられません。つまり、カナダ・メソジスト教会の性質である「奉仕」と「開拓者精神」こそが、日本伝道を導いたといってもよいでしょう。

初代校主の新海栄太郎は、(新海七軒巻)といわれた豪農 七新海の本家の長男として生まれました。父は、国立第十銀行(現・山梨中央銀行)の取締役で、県議員を務めていました。弟 祐六は、栄太郎より8歳年下で、のちに2代目校主に就任しましたが、14歳のときに同志社に進学。栄太郎は、弟を京都に訪ねたとき、新島襄の説教を聞いており、学校のために寄附を募る新島に、即座に100円の寄附をしています。2000円あれば校舎が建つ時代の100円ですから、その価値は大変なものでした。新海たちが山梨英和女学校設立を進めているときに、山梨日日新聞や峡中日報がその詳細を記事にしているのも興味深い事実です。当地にとって、それだけ注目される出来事だったことが推し量れます。

山梨英和学院にとって奉仕と犠牲と献身は、観念的なものではなく、宣教師たちの生活と行動によって示されてきたものでした。新渡戸稲造が「太平洋の架け橋になる」と言ったように、初代校長ウイントミュートは「日本とカナダの架け橋になる」と心に決め、戦時下に国外退去を命じられたときも日本に留まって、東京・神田のニコライ堂に抑留されたまま、終戦の2カ月前に天に召されました。遺骨は戦争終結後に、太平洋の日付変更線の上に沈めてほしい、という遺言を残しています。



後列左3番目 初代校主 新海栄太郎(1864~1935年)
わずか25歳で校主となり、
山梨英和女学校設立を実現させました。